

# シニア世代の学びにおける情報リテラシー育成の重要性 -TMU プレミアム・カレッジの受講生調査を踏まえた考察-

伏木田 稚子, 永井 正洋

首都大学東京 大学教育センター

fushikida-wakako@tmu.ac.jp

## Importance of Information Literacy in Lifelong Learning for Seniors -A Consideration Based on Students' Surveys at TMU Premium College-

Wakako Fushikida, Masahiro Nagai

University Education Center, Tokyo Metropolitan Univ.

### 概要

本研究では、生涯学習を支える情報リテラシーの育成に着目し、シニア世代が高齢者大学や大学開放事業において幅広く継続的に学知を学ぶ上で、どのような観点を授業内容に取り入れるべきか探索的に検討した。TMU プレミアム・カレッジの受講生 53 名を対象に質問紙調査を行った結果、タイピングやソフトウェアの活用を含むコンピュータの基本操作、セキュリティとメディアの利用を中心とした情報倫理について、スモール・ステップでの丁寧な指導と、基礎を押さえた体系的な授業の構成が重要であることが示唆された。

## 1 背景

近年、幅広い世代を対象とした「学び直し」に注目が集まっている。具体的には、大学や専門学校等への通学、通信教育やオンライン講座の受講、セミナーへの参加、書籍による独学など方法はさまざまである [1]。現職者や子育て・介護等により就業を中断している人々だけでなく、早期離職者、定年退職者を含む多様なニーズに合わせたプログラムの実施が試みられている。

その中でも主体的なキャリア形成を目指す学び直しは、「リカレント教育」と呼ばれ、学校教育を人々の生涯にわたって分散させようとする理念に基づいている。諸外国ではフルタイムの就学と就職の繰り返しと認識されているが、日本ではさらに、心の豊かさや生きがいのために学ぶ場合、学校以外の場で学ぶ場合なども広く含まれる [2]。

生涯にわたる学びが求められる背景には、「人生 100 年時代」という用語で語られる長寿社会の到来と、それに伴う経済社会システムの改革がある [3]。100 年という長い期間をより充実したものにするためには、生涯を通じた学習が重要とされる中、現にシニア世代の人々は、多方面に関心を持ちながら自身の資質や能力向上のために学び続けたいと考えている [4]。

そうしたニーズに応えてきた学習機会のひとつが、政府の高齢者事業として奨励され、日本国内の多くの自治体で開かれている高齢者大学である [4]。老人大学、シルバーカレッジ、シニアカレッジ、長寿大学など、その呼称はさまざまであるが、シニア世代の生きがいや自己実現、社会参加等の支援を目的に、多種多様な講義やゼミナールが展開されている。

また最近では、学生の定員確保の問題等を背景とする大学開放事業が顕在化し、シニア層が一般学生と同じ授業を受けるタイプや、独自のコースの授業を受けるタイプに分けることができる [5]。本研究が対象とした「TMU プレミアム・カレッジ (3 方法で後述)」はその折衷型であり、大学が有する教育研究のリソースを活用した学びと交流の場の提供が目指されている。

## 2 問題と目的

シニア世代の学び (一般的に使用される「高齢者学習」とほぼ同義) の内容と編成について、[6] は大きく応用と基礎に分けた上で、前者には生活経験の中で展開される内容や健康への焦点化、芸術・創作活動などに関する教科が、後者には自分の人生や経験を踏まえた省察、他の学習を行う上での道具的基礎となる学習内容が該当すると整理

している。特に、言語やコンピュータ等はあらゆる学習の規定部分になると考えられ、いかなる年代にも重要と位置づけられている [6]。

これに関連して、生涯学習におけるコンピュータの利用に着目すると、海外では近年、情報リテラシー (information literacy) と生涯学習 (lifelong learning) は切っても切り離せない関係にあると主張されはじめている。例えば、情報リテラシーは慣れ親しんだ環境から不慣れな状況への知識の適用を促し、人々が自立した生涯学習者となるために不可欠な力だと考えられている [7]。さらに、生涯学習はテクノロジーの変化に対応した情報の検索、活用、共有のスキルを必要としている [8] という指摘からも、シニア世代にとっての情報リテラシーの重要性が読み取れよう。

けれども、これまでの情報教育は基本的に、初等から高等教育までを対象としており、シニア世代はパソコン教室や市民講座等を通じて、操作方法やスキルを学習する形態が一般的である。そのため、関連する先行研究の多くは、個別の実践プログラムやその評価に関するものが大半であり、シニア世代が習得すべき情報リテラシーの全体像や体系的な学習内容を検討する試みは、管見の限り見当たらない。

そこで本研究では、前述の高齢者大学や大学開放事業のような生涯学習の場において、シニア世代が幅広く継続的に学知を学ぶ上で、どのような情報リテラシーを育成することが求められているのかを探索的に検討する。具体的には、これまでのコンピュータやインターネットの利用経験に加えて、実際の学習場面で必要とされる文書作成、データの整理・集計、プレゼンテーションに関する経験や、コンピュータの基本操作、ネットワークと情報セキュリティ、情報とメディアの利用に係る状況を問うことで、どのような観点を授業に取り入れるべきかについて議論したいと考えた。

## 3 方法

### 3.1 調査の対象

本研究では、首都大学東京 南大沢キャンパスにおいて、2019年4月に開講された「TMU プレミアム・カレッジ」を対象とした。「50歳からの新たな学舎」「生涯学べる100歳大学」をキャッチフレーズに、「首都・東京をフィールドに学ぶ」をテーマとした独自のカリキュラムを提供している。受講生は歴史や心理学などの文系科目、小笠原の

自然保全等の自然科学、トンネルや橋梁等の土木工学を始めとする理系・文理融合科目、栄養学といった幅広い科目を選択することができるほか、ゼミナールに参加して修了論文を作成し、その成果についての発表が課されている。

今年度の入学者は計53名で、詳細な情報は現時点で未公開のため数値は割愛するが、男女の内訳はほぼ半々であった。年代については、60代が約半数を占め、次いで50代が3割程度、最高齢は80代であった。

### 3.2 調査の手順

授業の開始時期や受講生にかかる負担などを考慮し、質問紙調査を2回に分けて実施した。はじめに、3月下旬の受講ガイダンスにて質問調査票を配布した。この調査 (以降、調査1と表記) では、コンピュータの利用経験を把握し、今後の授業実践に役立てることが目的であった。次に、すべての科目に先立って開かれた情報リテラシーの基礎を扱う授業の中で、学内LMSのアンケート機能を活用した調査 (以降、調査2と表記) を行った。調査1と目的はほぼ同じだが、実生活でのコンピュータの活用能力について、知識や技能の主観的な評価を得ようとした。いずれの調査も、5分程度で取り組めるよう構成した。回答データは個人を特定できない形で処理・集計した上で、授業担当者へのフィードバックや学内外の報告に活用する可能性を明示し、協力を依頼した。

### 3.2 質問項目

調査1は、コンピュータの利用経験 (所有、利用年数、利用頻度、利用目的)、インターネットの利用経験 (利用年数、利用頻度)、他の科目で使用予定のソフトウェアの利用経験 (文書作成、データの整理・集計、スライド作成)、授業でのコンピュータ利用に関する不安などから構成した。各項目について選択肢を複数提示し、「あてはまる番号1つ/すべてに○を付けてください」と指示した。

調査2では、コンピュータの基本操作 (タイピング、各種ソフトウェアの活用)、ネットワークと情報セキュリティ (コンピュータウィルスの対策、電子データのバックアップほか)、情報とメディアの利用 (電子メールの送受信、SNSの利用、検索エンジンを用いた情報収集ほか) について、「…プレミアム・カレッジへの入学前からできていたことをすべて選んでください。」という形式で回答を求めた。

## 4 結果と考察

シニア世代を対象に情報リテラシーの育成を考える上で、重要な示唆が得られた項目を中心に、回答の傾向と読み取れる特徴について論じたい。

### 4.1 コンピュータの利用経験

#### (1) コンピュータの所有

複数選択を可としており、「自分専用のコンピュータを持っている」が38名(71.7%)、「自宅に家族共有のコンピュータがある」が22名(41.5%)となった。どちらにもあてはまらず、かつ「自宅にコンピュータがない」と回答した受講生は2名(3.8%)であった。このことから、多くの受講生は、大学外でコンピュータを利用して授業の課題等に取り組める状況が明らかになった一方で、学内では自学自習用にコンピュータ教室が開放されており、学生チューターの支援が受けられることを案内すべき必要性も示された。

#### (2) コンピュータの利用年数

10年以上が47名(88.7%)と最も多く、次いで1年以上5年未満が3名(5.7%)、5年以上10年未満が2名(3.8%)、利用したことがない受講生は1名(1.9%)であった。利用頻度については、毎日が41名(77.4%)、2~3日に1回程度が4名(7.5%)、1週間に1回程度が2名(3.8%)、2~3週間に1回程度が1名(1.9%)、月に1回程度に満たない受講生が4名(7.5%)となった。以上より、約8割の受講生は、コンピュータの利用に慣れていると推察されるが、一定数はほぼ初心者と捉えられるため、授業等での丁寧な指導が不可欠といえよう。

#### (3) コンピュータの利用目的

あてはまる受講生が7割を超えた選択肢は、「ウェブサイトの検索・閲覧」が51名(96.2%)、「メールの送受信」が46名(86.8%)、「文書や資料等の作成」が41名(77.4%)となった(図1)。それ以外では、「新聞・ニュースなどの情報収集(34名、64.2%)」「販売を含むショッピング(30名、56.6%)」「イベントの申込(28名、52.8%)」「動画・音楽の視聴(27名、50.9%)」「オンライン入出金・オンライン決済(20名、37.7%)」などがあり、幅広い目的でコンピュータが利用されている実態が示された。そのため、インターネット関連のトラブルに巻き込まれないためにも、情報リテラシーの基礎を扱う授業では、情報倫理について十分な説明が必要となる。

### 4.2 実生活でのコンピュータの活用能力

#### (4) コンピュータの基本操作

図2にまとめた通り、「アルファベットについて、大文字・小文字、全角・半角の入力ができる」と回答した受講生は52名(96.3%)であったものの、「キーボードを使用する際、手元を見ずに文字を入力すること(タッチタイピング)ができる」は20名(37.0%)と少なく、タイピングに関する練習を取り入れた方がよいと考えられる。また、他の科目で使用予定のソフトウェアを活用した文書作成、データの整理・集計、スライド作成については、できると自己評価した受講生が3割から5割以内に留まっているため、実践的な課題を通じた習得が望まれる。

この点に関して、各種ソフトウェアの機能毎に利用経験を調べた結果、文書作成については「改行しながら文章を入力する(46名、86.8%)」「書体やフォントサイズを変更する(41名、77.4%)」「文字揃えや箇条書きを用いる(36名、67.9%)」のように、約7割以上の受講生が基本的な操作の経験があった。それに対し、「表・図形・画像などを文書に挿入する」は24名(45.3%)と半数に満たず、そもそも表計算ソフトを用いて「データをもとにグラフを作成する(24名、45.3%)」経験も十分ではないため、レポート作成を課す授業を想定した練習が必要であろう。

なお、「ソート(並び替え)やフィルタを用いてデータを集計する(21名、39.6%)」「数式(四則演算)や関数(合計・平均など)を用いてデータを分析する(18名、34.0%)」などの経験がある受講生は4割を下回っていた。ゆえに、データの整理・集計に関しては、スモール・ステップの教授を意識するよう気をつけたい。

プレゼンテーションソフトに関しては、「箇条書きを用いてスライドを作成する(29名、54.7%)」「表・図形・画像などをスライドに挿入する(23名、43.4%)」ではそれぞれ4割を超えたが、「わからない・利用したことがない」と答えた受講生は22名(41.5%)に上った。TMUプレミアム・カレッジでは、成果発表会でのプレゼンテーションが課されており、そのことを不安だと感じている受講生が25名(47.2%)と約半数を占めることから、基礎を押さえた体系的な授業を構成すべきである。

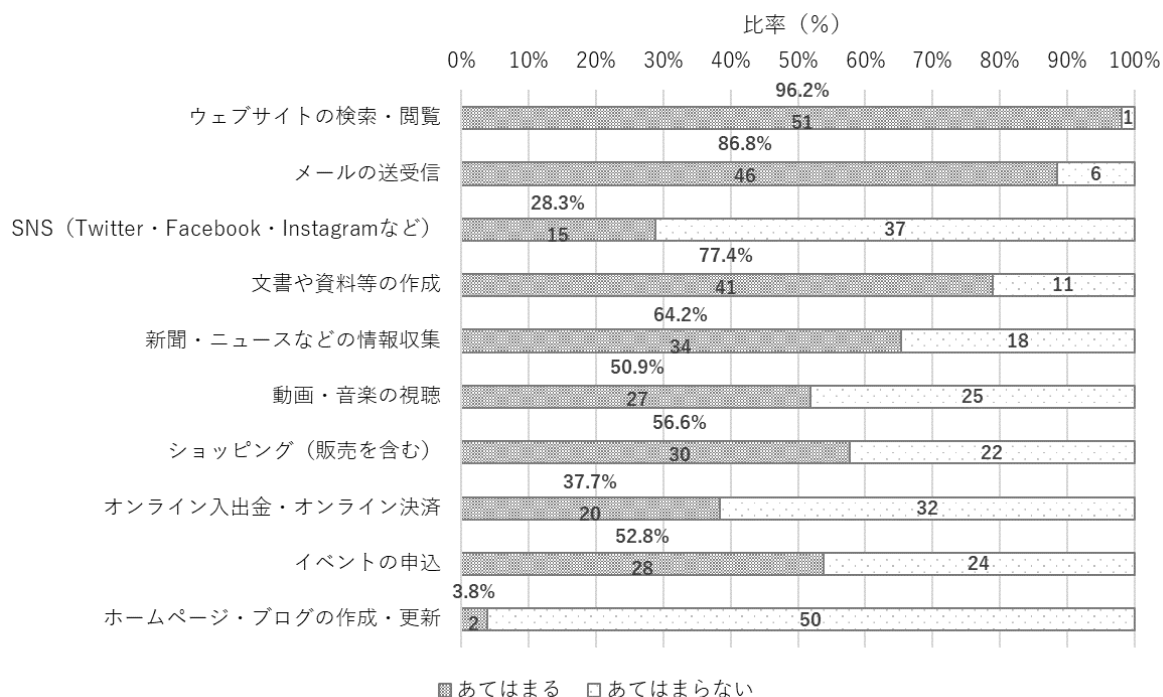


図1 コンピュータの利用目的についての集計結果

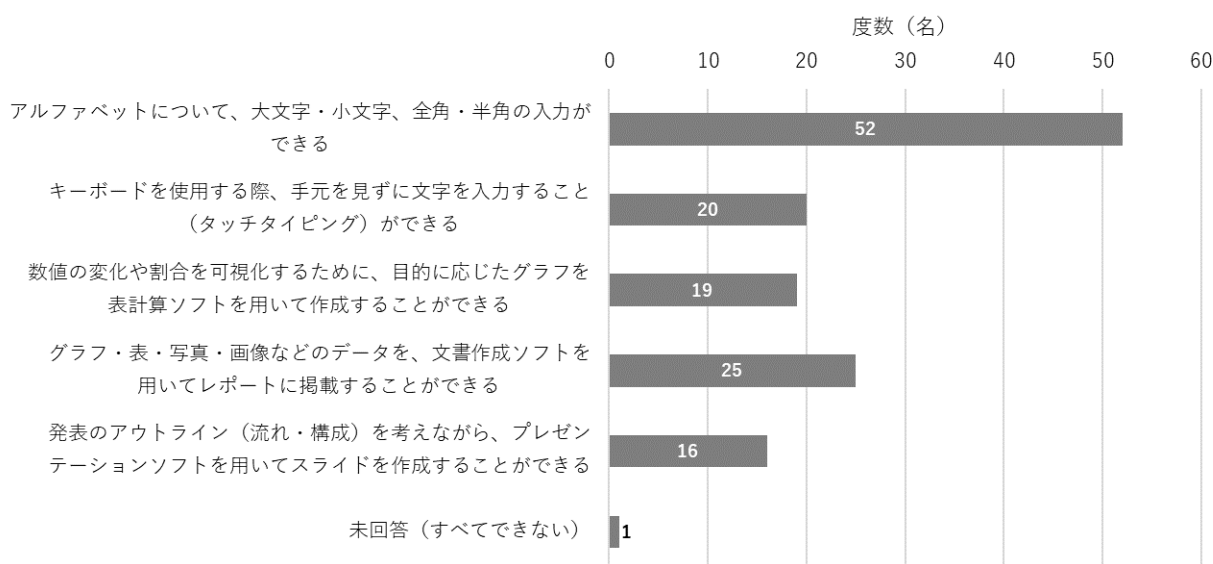


図2 コンピュータの基本操作についての集計結果

### (5) 情報セキュリティとメディアの利用

「文書・画像・動画ファイルなどの電子データについて、破損や焼失に備えてバックアップをとることができる (30名、55.6%)」「個人情報の流出やサイバー犯罪の被害を防ぐために、コンピュータウイルスなどの対策をとることができる (25名、46.3%)」と回答した受講生は、どちらも6割を下回っていた。前述の情報倫理の重要性とも重なるが、シニア世代の情報セキュリティに対する理解の向上が求められている。

一方で、メディアの利用については、「コンピュータを使って、電子メールの送受信ができる (52名、96.3%)」「情報を収集・整理する際に、メディア (新聞・テレビ・ラジオ・インターネットなど) の特徴を考えることができる (49名、90.7%)」「検索エンジン (Google・Yahoo など) を利用して、必要な情報を収集することができる (49名、90.7%)」のように、全体を通して高い自己評価が得られた。ただし、「SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) を適切に利用し、他者と

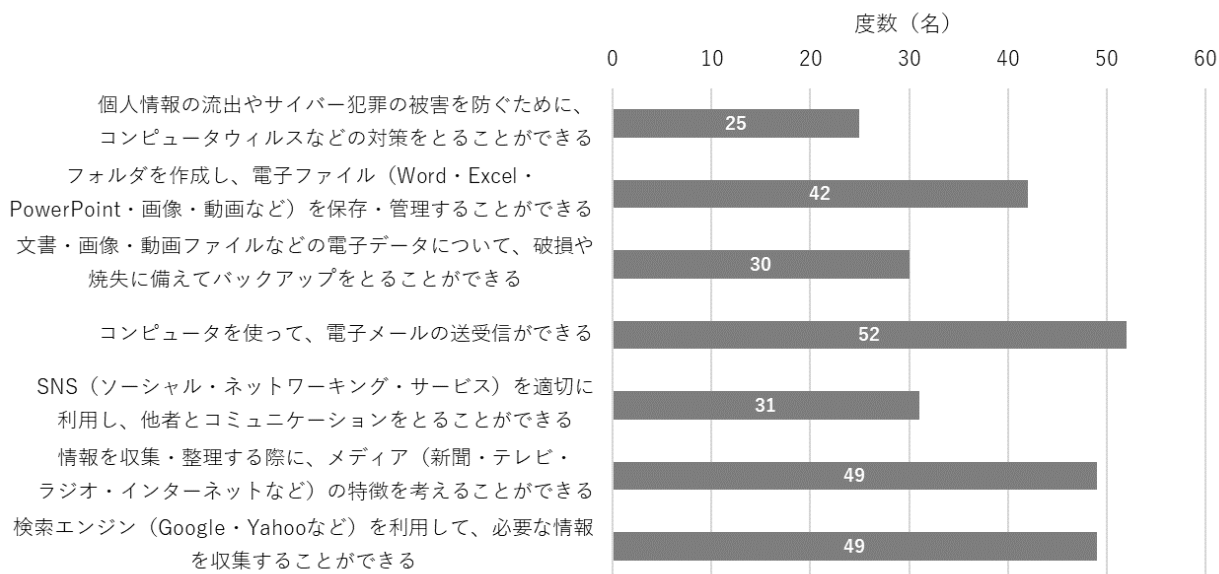


図3 情報セキュリティとメディアの利用についての集計結果 (一部抜粋)

「コミュニケーションをとることができる」は31名 (57.4%) に留まっており、新しいメディアの特性に対して理解を促すことも必要であろう。

## 5 総合考察

本研究では、生涯学習を支える情報リテラシーに着眼し、シニア世代が高齢者大学や大学開放事業において幅広く継続的に学知を学ぶ上で、どのような観点を授業内容に取り入れるべきかを探索的に検討した。TMU プレミアム・カレッジの受講生53名を対象に、各種科目の開講前に質問紙調査を行った結果、得られた示唆は以下の3点に集約された。

1. コンピュータの利用経験がなく、(タッチ) タイピングに不慣れな受講生もいるため、丁寧な指導と十分な練習機会を提供する
2. 他の科目で課され得るレポート作成やプレゼンテーションを想定し、各種ソフトウェアの活用についてスモール・ステップで教授すると共に、基礎を押さえた体系的な授業を構成する
3. 情報セキュリティや新しいメディアの利用など、インターネット関連のトラブルに巻き込まれないよう、情報倫理について十分に説明する

今後は本研究の知見を基に、シニア世代の学びに必要な情報リテラシーの育成について、学習プログラムの実践や評価に取り組んでいきたい。

## 謝辞

ご協力くださった皆様に深謝いたします。

## 参考文献

- [1] 小寺信也、人生100年、「学び直し」には本当に効果がある－「経済財政白書」が示す雇用や年収への影響、東洋経済 ONLINE (<https://toyo-keizai.net/articles/-/230901>)、東洋経済新報社、2018
- [2] 文部省、生涯学習時代に向けた大学改革－高等教育へのアクセスの拡大－、平成7年度我が国の文教施策－新しい大学像を求めて：進む高等教育の改革、1995
- [3] 首相官邸 (2017) 人生100年時代構想会議中間報告、2017
- [4] 牧野篤、シニア世代の学びと社会－大学がしかける知の循環、勁草書房、2009
- [5] 堀薫夫、第4章 高齢者の社会参加と生涯学習、教育老年学と高齢者学習、102-140、学文社、2012
- [6] 堀薫夫、第1章 教育老年学におけるエイジングと高齢者学習の理論、教育老年学と高齢者学習、1-53、学文社、2012
- [7] Solmaz, D. Y., Relationship between lifelong learning levels and information literacy skills in teacher candidates, Universal Journal of Educational Research, 5, 6, 939-946, 2017
- [8] Salim, S. F. M. Y. S., Mahmood, M. F., & Ahmad, A. B., The importance of information literacy to support lifelong learning in convergence era, International Journal of Academic Research in Progressive Education and Development, 7, 3, 352-362, 2018